

愛心から 発せられる 言葉は 必ず相手に 伝わる



子育てのノウハウではなく、母親と子供の「心と自信を育む」ための講座を実施されている田崎由美さん。単なる言葉ではなく、愛心・真心から出た言葉には、目に見えない大きな力が宿っているといえます。難病を患ったご子息の闘病を支える中で田崎さんが掴んだ学びを、ご自身の言葉で語っていただきました。

マザーズスマイルアンバサダー協会
代表理事
田崎由美

たぎき・ゆみ——昭和49年福岡県生まれ。短大卒業後、日産自動車メーカー直営のショールームに入社、結婚を機に退職。2児の母であり、息子の大病を機に命と向き合うようになる。12年間の専業主婦を経て、平成24年からマザーズスマイルアンバサダー協会の前身マザーズマイルコミュニケーションを立ち上げる。これまでに3,700名以上に親子のコミュニケーションのあり方を伝え続ける。

ちよつとした言葉掛けて 親子の会話が変わる

一人でも多くのお母さんと子供を幸せにしたい——

そんな切なる願いを込めて、二〇一二年からお母さん方に「心と自信を育む子供とのコミュニケーション術」をお伝えするようになり、身近なママ友から始め、たこの活動は口コミで広がり、いまでは小中学校の保護者向け講演会や教職員向けの教育委員会の場、オンラインでは海外の方とも繋がり、累計三千七百名以上の方に

話してきたことになりました。

近年は不登校や行き渋りが増加傾向にある上、「自分の育て方が悪かったのでは」「うちの子は〇〇ができない」など、ご自身の子育てに自信のないお母さんがとても多くなりました。世の中に子育てに関する情報が多すぎるが故に、インターネット上に溢れるよき母親像やよその家の成功事例と比べ、落ち込んでしまうのです。そして、目の前にいる子供との問題にも拘らず、直接子供と話し合わずにネットに答えを探し求めてしまう。ちよつとしたことでもいいのです。

子供が何に悩みを抱え、どんな気持ちでいるのか、心を通わせ聞いてみてほしい。学校から帰ってきた子供に「お帰り」と声を掛け、「きょうはどうだった?」と聞く。たった三分間でも、他愛もない内容でも、心の通った会話を大切にしたい。それが講座で伝え続けていく私の願いです。

息子が大病を通して 教えてくれたこと

私がこうした活動をするようになったのは、他でもない、我が子の子育てがきっかけでした。本人

のことなので詳細は伏せますが、第一子の息子は三歳の時に大病を患い、一年間の入院を余儀なくされました。病気が発覚した直後、精密検査を受けるたびに悪いほう悪いほうへと診断され、将来、健常者と比べて知力が二割ほど劣るかもしれないと告げられた時には、ショックのあまり健康体に産んであげられなかった自分を責め続けました。現実を直視できず、寝て起きたら夢だったことにならないか……何度そんなことを考えたでしょう。

思いは現実になると言いますか



撮る写真のシャッターを押し、写す瞬間は、状況はほとんど残っていない。

ら、仏教詩人・坂村真民先生の「念ずれば花ひらく」、中村天風先生の「今日一日、怒らず、恐れず、悲しまず」、山本有三先生が訳された詩「心に太陽を持って。くちびるに歌を持って」などたくさん言葉が壁中に貼り、心が折れそうになるたびに見返しました。それでも、夜、暗闇になると止めどない不安が押し寄せてくるのです。「明日この子が息をしないかったら……」「この熱が悪化して、大事に至ったら……」。

自分の中で、泣くことの許可を出していました。目的は、明日また笑顔になるため。泣きたい時は泣こう、そう決めて涙が枯れるほど泣き続けた日もあります。

しかし、すぐに不安や心配事、心を奪われてしまう自分が情けなくて仕方ありませんでした。目の前の息子はこんなにも生きようと

必死なのに、私は自分の心すら自己管理できない……。

そんな自分の心を何とか前に向けようと、闘病中に百冊以上の本を読んだと思います。携帯電話の微かな明かりで本を照らし、暗い病室で一心不乱に答えを探し求めていました。

一年間の入院生活は三歳の息子にとっても、私たち夫婦にとっても辛く苦しいものでした。子供の将来、家族のことなど不安要素はいくらでもあり、それは病院の相部屋で懸命に闘っていた他のご家族も同様でした。しかし不思議なことに、病室には温かな空気が流れていたのです。きょうも生きていてくれた、きょうも無事に過ごせた。毎日そうした小さな感謝や愛に溢れ、皆の心が温かな気持ちで満たされていたのです。

たとえ子供が薬を飲むことを拒んでも、のみたくない気持ちは受け止めながら、周囲にいる家族が「でも、あなたに生きていてほしいから、薬をのんでほしい」と本音を伝える。そうした心の通ったやり取りが毎日行われていました。辛く苦しくはありましたが、決して不幸ではなかったのです。

子供たちと二年間続けた人間学の読書会

息子の病は完治に十年はかかると言われたものの、一年で退院し、通院治療に切り替わりました。入院中の生活が感謝と愛に溢れた日々だったためか、退院して外の世界の現実を目の当たりにした時、衝撃を受けました。

退院したご挨拶に、近所で親しくさせていただいていたある学習塾の先生のところへ伺ったところ、たまたま教室から出てきた親子の会話が聞こえてきたのです。

「きょうはどのくらい進んだ？」
「このくらい」「なんでそんなちょっとしかできないの！」

そうお母さんが子供を叱っていたのです。驚きましたが、これが現実なのだ。そう感じた時に、「もったいない！」と心の底から湧き上がる思いがありました。こうして健康で、自由に家族と過ごせて、お稽古をするチャンスもある。それだけで幸せなはずなのに、「あなたは駄目ね」と否定の言葉をいっぱい浴びせられているとしたら、その子供たちの心は、どんどん自信を失ってしまう。もったいない。

もったいなさすぎる……

以来、子供の根っこ、心と自信を育むには、どうすればいいかを考えることがライフワークとなり、『致知』や美智子上皇后陛下下の「ナルちゃん憲法」をはじめ、森信三先生、土屋秀宇先生、陰山英男先生、鍵山秀三郎先生など、様々な分野の先生方の本を読んで勉強するようになりました。

息子との寝る前の日課は、「よいことがある、ますますよくなる、きつとよくなる、必ずよくなる、おやすみ！」

と呟くことでしたが、これも中村天風先生の教えをもとにつくった息子との合い言葉です。毎日毎日、祈り続けたことが奏功したのか、毎月だった検診が次第に三か月に一回、半年に一回なり、最後は一年に一回となりました。それだけ症状が安定していったのです。冒頭で触れた活動を始めるきっかけとなったのは、息子が小学校五年生の時。六歳下に生まれた妹が動き回れる歳になり、これから一緒に遊べる時間が増えてくる時期だったこともあって、息子に中学受験をしたいかどうかを尋ねてみました。すると、「僕はいま、家

7名の子供たちと行った読書会。
後列左がご子息で、中列左が田崎さん



族との時間を優先させたい」と言ったため、受験勉強の代わりに、何か心を育むことをしてあげようと決めたのです。

そこで手に取ったのが『10代のための人間学』（著・森信三）でした。小学校五、六年生の二年間、中学受験をしない七人の学習塾の友達と共に、この本を使って毎月一度、読書会を開催しました。毎回一章ずつ読み進めながら、何のために生きるのか？ といったテーマとことん向き合ってきたのです。子供たちは未熟ながらもそれぞれ自分の考えを言葉にしてくれました。

二年間続けたことによる子供たちの変化は見違えるようでした。初めは何かを発言する際に親の顔を窺っていた子が、自分の気持ちを堂々と伝えるようになりました。また、学力だけではなく、人のために行動してほしいと願い、各自にお手伝い目標を立ててもらっていたのですが、それぞれがやらなくなってしまうスランプ時期を乗り越え、自ら設けた目標を頑張り通してくれたのです。

子供だけではありません。一緒に学んでいた私自身にとっても大変学び多き一冊でした。「何のために生きるのか」を初めて真剣に考えましたし、聴く力の重要性を再認識することができました。

子供はちゃんと考える力を持っています。普段の生活の中で親がしっかり子供の話や意見に耳を傾けてあげれば、教育者の東井義雄先生の「自分は自分の主人公」という言葉の通り、自分の人生に責任を持った自立した人に育つと確信しました。それから親子のコミュニケーションやコーチングなどを本格的に学び、少しずつ活動を広げていったのです。

「愛語よく廻天の力あり」 をモットーに

私は仕事柄、言葉が人に与える影響を日々感じています。どんな言葉を心に抱き発するか、それがその日一日を決め、ひいては人生をも左右する。言葉というのは心を表現するものだと思っています。

私の講座に参加された方で、特に忘れられない方がいらっしゃいます。小学校一年生のお子さんが途中から一人で学校に通えなくなり、毎日一緒に登校し、教室の後ろで授業が終わるまで見守っていたらしいそうです。将来への不安やもどかしさ、思い通りにならない苛立ちなどが溜まって私のところに来られました。

私がお話をお話をただひたすら聴いて差し上げたところ、「ただ話を聞いてもらうという事は、こんなにも大切なんですね」と気づいてくださいました。そして、私が話を聴いて正直に感じたその方の頑張りや尊いことを惜しみなく言葉にし、「あなたは必ずこれを乗り越えられると信じています」とお伝えしました。

その後その方は自分の時間を

すべて子供の心と自信を育むために使われました。一滴一滴、大海に水を溜めるように子供に愛情を注いできたからでしょう。お子さんは二年生に上がる頃に一人で学校に通えるようになったそうです。その方から報告があった時、二人で号泣しながら喜び合いました。

この母親の愛の力について、長年大切にしている言葉があります。それが道元禅師の「愛語よく廻天の力あり」です。愛語は愛心よりおこりて、愛心は慈悲の心をもととする。つまり、単なる言葉ではなく、愛の気持ちから湧き出てくる言葉には、天をも変える力が込められているという意味です。

忙しさゆえにバツと投げかけてしまった言葉ではなく、愛心から湧き出た言葉は、相手の心にきちんと伝わるものです。私自身、この愛心、愛語をモットーにお母さん方にお話ししていますし、お母さんたちにもお子さんに愛心から出た言葉を掛けてくださいとお願いしています。

自分の人生を 自分で選択して生きる

現在息子は無事に成人し、心豊

かに、自立した子に育ってくれました。それを実感したのが、大学進学を決める時でした。

実は、大学受験を目前に控えた高校三年生の十月、後遺症で脳にできていた血管腫が破裂し、十時間を超える手術を二度も行わざるを得なくなりました。受験には向き合えなくなったのです。

医師になりたいと志を持って勉強をしていた息子に、正直に愛心から湧き出した思いを伝えました。

「今回の手術は完治のためにするもので、今年には受験が厳しくなる。ただ、私は受験よりもあなたに生きていてほしい。そして、私が大丈夫だって言うから、この手術は絶対に大丈夫」

「知っているし、分かっているよ。ママがそう言うなら絶対に大丈夫だと信じている」

息子は力強くそう答え、自分の運命を「ミリも嘆かず、一度も愚痴を言いませんでした。オベ室に自分で歩いて入っていく後ろ姿を見た時に、いつの間にか大きくなった息子を頼もしく感じました。進路を決める際にも、私が親心ゆえに自宅近くの大学を勧めようとしたところ、「最後まで自分でや

らせてほしい。そこで起こる出来事は全部自分で引き受けるから」と、自ら進路を選択していきました。体力の低下に苦しみながらも受験勉強に励み、二浪の末に現在は歯学部で頑張っています。

私は息子を可哀相だと思ったことが一度もありません。心から尊敬しています。あんなに小さかった子が命と真剣に向き合い、いまは自分の人生の主人公としてしっかり歩んでくれている、その姿を心から誇りに思っています。

大学進学と共に一人暮らしを始め、息子は実家を出ていきました。こうして改めて振り返ると、子育ての期間は長いようで一瞬です。人生百年と言われる時代の僅か二十年ほど。その短い期間に、本当に子供に掛けたい言葉を、伝えたい思いを届けてほしい。この願いが私の原動力です。

子育てのノウハウではなく 心と自信を育む活動

子供にとって親は代わりがいません。だからこそ、親の言葉の影響力は絶対。責任重大です。そんなことを小さい頃から考えていたため、長男を出産し、この手に抱

いた時に感じたのが、「自分は親になれないかもしれない」という不安でした。他のお母さんが「可愛い」と我が子をお愛でる瞬間に、私はこの子を立派に育て上げる自信がないと感じてしまったのです。

自信がないならなりに精いっぱい勉強しようと、子育てに関する本を読み、勉強会にも参加しました。ママ友と一緒に本を買って求め、子供の能力をもっと伸ばすにはどうすればいいかと意欲的に学んでいました。

その後、息子が大病を患ったのですが、その時ハッとさせられました。自分は子供の能力を伸ばすことばかりに注力していたけれど、本当は、いまこうして生きていること、子育てのチャンスをもらったこと自体がありがたいことだった。息子からそう教えられた気がして、百叩きに遭ったように考え方が一変しました。

もしあのままの教育を続けていては、「もっと頑張れ」と言い過ぎて、違う形で子供を殺していたと思います。現在、私が単に子育てのやり方を伝えるのではなく、お母さんと子供の心と自信を育む活動をしているのはこうした背景が

あるからです。

お母さんが子供に発する言葉は、結局自分に掛けている言葉でもあります。自分が駄目だと落ち込んでいる時は、不安になって子供を責めてしまう。逆に、自分の小さな努力に気づければ、子供の小さな努力にも気づけるようになります。そのため、私の講座では必ず寝る前にその日の自分の頑張りを三つ探して、自分に愛の言葉を掛けて寝ましょうと約束しています。まずはお母さん自身の心を満たし、我が子に愛心のある言葉を掛けられる状態にして差し上げる。お母さんの心が満たされれば、自然と子供にも愛のある言葉を掛けられるようになります。

人生とは習慣の連続です。日頃どんな習慣を持ち、どんな言葉で自分にも他人にも掛けていくか。よい一日の積み重ねで、結局人生が変わっていきます。息子の闘病中、多くの方から掛けていただいた言葉、読書を通じて出逢った言葉に支えられ、救われて、いまがあります。言葉は生きる力になると実感しているからこそ、よい言葉を使う習慣を身につけ、自分の手で人生を切り拓く人が一人でも

増えることを願っています。